

自然誌 だぶり 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 83号

2010年 3月

鈴島暖地性植物群落は消えつつある

紀北町紀伊長島の沖合約1 kmにある鈴島にニホンジカ（以下、シカ）が上陸し、県指定天然記念物の植物群落に影響を与えていることは、既に本誌69・70号（2006年）で報告しました。その後の追加調査により、同島に上陸した獣はシカ雌雄各1個体以上と、さらにイノシシ（頭数不明）も確認できました。県等による駆除作業も実施されたようですが、十分な成果はあげられなかったらしく、本年3月13日の調査ではシカやイノシシのたくさんの足跡や新しい糞も確認できました。また、植生被害も加速化しておりハマユウなどの海浜植物群落は壊滅状態で、このような環境を繁殖場所にするウチヤマセンニュウなどの鳥類への影響も懸念されます。なお、シカについては雌雄の上陸が確認されていることから繁殖している可能性も高く、対応が遅れるほど駆除も困難になってくると思われます。



写真 右下から時計回りに、2才のオスジカ（2006年12月22日撮影）、メスジカ（2006年12月23日撮影）、イノシシ（2006年11月30日撮影）、海浜植物群落（2004年7月9日撮影）、同（同じ場所、2010年3月13日撮影）

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

ところ変わればシカ変わる

佐野 明

今、三重県の山林はニホンジカ（以下、シカ：写真1）による食害でえらいことになっています。特に目立つのは林木の剥皮害。県内各地でシカによって樹皮を剥がされた木が目につきます。

ニホンカモシカやノウサギは大きく成長した木を食害することはほとんどありませんが、困ったことにシカは大木の樹皮さえ剥いてしまいます。何十年もかけて大切に育ててきたスギやヒノキが被害にあい、不況にあえぐ林業経営者に深刻なダメージを与えています。



写真1 スギ林で見かけたシカの集団（津市美杉町）

シカによる剥皮害は「樹皮食害（写真2）」と「角こすり害（写真3）」に大別されますが、どちらのタイプが多いかは地域によって大きく異なります。すなわち、九州や島根県では角こすりがほとんどであるのに対し、栃木県、奈良県、兵庫県等では主として樹皮食害によると報告されています。私はこれまで三重県内約160カ所のスギ・ヒノキ林で調査を行い、相当に自信を持って、あちこちの雑誌等に「三重県では樹皮食害がほとんど、角こすりはまれ」であると書き散らかしてきました（たとえば本誌78号）。しかし、2010年1月、熊野市紀和町の山林にシカの生息密度調査に出かけたところ、角こすりばかりで、樹皮食害のほとんど見られない地域があることがわかりました。全国レベルではなく、自分のフィールドの中でも「ところ変わればシカ変わる」現象があり、それを見落としていたこととなります。

「シカがなぜ樹皮を剥くのか」を知ることは被害対策を講じる上で基本中の基本。過去の文献や先入観にとらわれることなく、広く実態調査をして、地域の実情を把握することの大切さを今さらながら思い知らされました。



写真2 シカに樹皮を食害されたヒノキ（菰野町）



写真3 シカの角こすりで剥皮されたヒノキ
（熊野市紀和町）

〈さの あきら：津市河辺町〉

三重県大紀町の阿曾カルストで得られた陸産貝類

柏木 健 司

三重県大紀町の旧大宮町地内に位置する阿曾カルストは、大内山川支流の奥河内川南側山地斜面に広く広がり、大小様々な石灰岩洞窟の存在で知られています¹⁾。著者は、阿曾カルストの地質と石灰岩洞窟を主たる対象に、1998年から地表と地下の両側面から野外地質調査を行っています。その過程で、2008年3月中旬に石灰岩洞窟の洞口や石灰岩塊の隙間に散在する陸産貝類の死殻を採取しました。採取箇所は、八重谷の湧水が位置する沢の北東側斜面から尾根までの範囲です。同定した陸産貝類を表1と図1に示します。

今回の採取で多産したヤマタニシ、オオギセル、シママイマイおよびオオケマイマイは、旧大宮町地内で多くみられ²⁾、同じく多産種のコベソマイマイとヤマグルマも旧大宮町地内でよく見られるようです²⁾。なお、シママイマイは三重県南部に分布が限られます。その他、キオオベソマイマイは紀伊半島南部に分布し、環境省の準絶滅危惧に指定されています。本州、四国、九州に広く分布するヤマキサゴは、三重県北部（藤原岳など）では記録がある一方で、三重県南部での生息確認は極めて少ないものの、阿曾での生息が既に報告されています³⁾。

ところで、本報告の12種のうち8種は、石灰岩洞窟の洞口付近（08031102）で採取されています。常に湿潤状態にある洞窟環境が、陸産貝類に適した棲息環境を与えているのでしょう。なお、陸産貝類の同定に際しては、和歌山県白浜町の湊 宏先生にご指導頂きました。記して感謝します。

文 献

¹⁾磯部, 1986, 大宮町史 自然編, 29-33. ²⁾伊藤, 1986, 大宮町史 自然編, 226-236. ³⁾阿部, 1986, 三重県その自然と動物, 545-556.

表1 阿曾カルストから産する陸産貝類

図1 番号	種名	地点番号						
		08031102	08031601	08031606	08031610	08031612	08031614	08031617
ヤマキサゴ科 Helicinidae								
1	ヤマキサゴ <i>Waldemaria japonica</i> (A. Adams 1861)	1						
ヤマタニシ科 Cyclophoridae								
2	ヤマタニシ <i>Cyclophorus herklotsi</i> Martens 1860	3	1	1	1	2	3	5
ヤマグルマ科 Spirostomatidae								
3	ヤマグルマ <i>Spirostoma japonicum japonicum</i> (A. Adams 1867)	9						
キセルガイモドキ科 Enidae								
4	キセルガイモドキ <i>Mirus reinianus</i> (Kobelt 1875)						1	1
キセルガイ科 Clausiliidae								
5	オオギセル (マルテンスギセル) <i>Megalophaedusa martensi</i> (Martens 1860)	5			1		3	2
ナンバンマイマイ科 Camaenidae								
6	コベソマイマイ <i>Satsuma (Satsuma) myomphala myomphala</i> (Martens 1865)	2	1				6	6
7	シママイマイ <i>Satsuma (Satsuma) japonica simaensis</i> Kuroda and Habe, in Habe 1991						4	8
	ニッポンマイマイ <i>Satsuma (Satsuma) japonica japonica</i> (Pfeiffer 1847)	1						
オナジマイマイ科 Bradybaenidae								
8	オオケマイマイ <i>Aegista (Plectotropis) vulgivaga vulgivaga</i> (Schmacker and Boettger 1890)	6					1	1
9	キオオベソマイマイ <i>Aegista (Aegista) tumida cavata</i> (Pilsbry 1902)						1	
	ギューリキマイマイ? <i>Euhadra eoa gulicki</i> Pilsbry 1928		2					1
	オトメマイマイ類 <i>Trishoplita</i> spp.	2	1					1

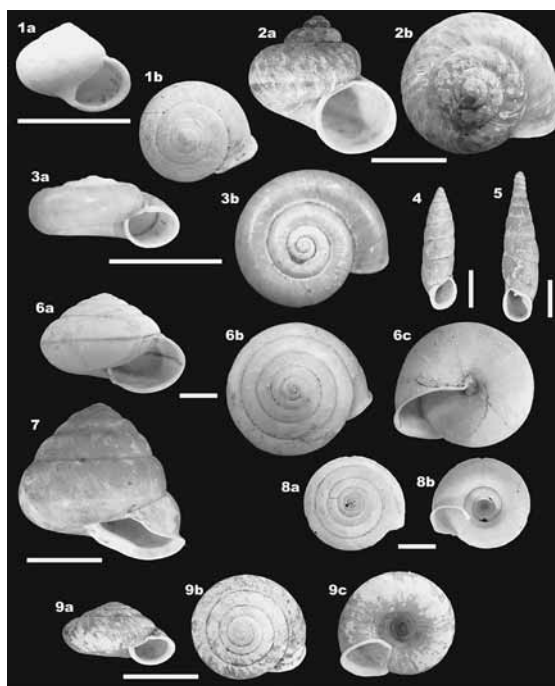


図1 阿曾カルストから採取した陸産貝類。図中の番号は表1の左端の番号に対応します。スケールバーはそれぞれ1 cmです。

〈かしわぎ けんじ：富山大学〉

和具大島の今

清水 善吉

和具大島は、志摩市先志摩半島の南方約2.5kmの沖合にあって、東西約350m、南北150m、標高10mの平坦な無人島で(写真1)、ハマユウに代表される海浜植物群落は県の天然記念物に指定されています。この島に渡るには漁船をチャーターするしかありませんので、個人ではなかなか訪れることのできない所ですが、三重動物学会(事務局・鳥羽水族館内)主催の磯生物の観察会が2009年5月24日に同島で行われたので、参加させていただきました。

私の参加の目的は、主催者には申し訳ないのですが、磯生物とは別のところにありました。ひとつは、2004年6月8日に同島を訪れた際にみた外来植物であるアツバキミガヨラン(ユッカラン)の動向です。この植物は、在来の海浜植物を強く圧迫していることから、志摩市や環境省、志摩半島野生動物研究会などが協同して「ユッカラン駆除作戦」を行ってきました(半田, 2006)。そのおかげで、2004年にはアツバキミガヨランの中にハマユウが生育しているような状況だったのが(写真2)、今回の渡島ではアツバキミガヨランはほとんどみられませんでした(写真3)。しかしながら、この植物はほんの少しの根茎からでも発芽するそうなので、予断を許しません。

もうひとつは、県指定希少野生動植物種ウチヤマセンニュウの生息状況です(写真4)。この小鳥は、5～6月に本邦に渡来して、九州や紀伊半島、伊豆諸島などの島嶼で繁殖します。ウグイスの仲間ですので、草地や藪などの低い位置に椀型の巣をつくり産卵をします。和具大島での本種の個体数については、市川・中村(2004)は12羽、中村・若林(2005)は10羽を数えています。今回の確認はわずか2羽でした。

この急減の原因は为什么呢?考えられるのは、同島に侵入したドブネズミ(中村みつ子、私信)の影響です。本種の侵入時期は明らかではありませんが、2004年に訪れた時には糞なども目につきませんでしたので、それ以降と思われる。今回は、島内各所で本種のものと思われる糞がたくさん確認でき(写真5)、また、観察会参加者の一人によってドブネズミらしき動物が磯場で目撃されました。さらに、放置されたネズミ罠の中で白骨化したドブネズミの頭骨もみられました(写真6)。

ドブネズミが本島に生息しているのは確実で、糞の状況からは個体数も多そうです。おそらく、船に隠れて密航してきたものと思われるが、本種は雑食性であることから在来の動植物に与える影響は甚大です。そういえば、2004年にはたくさんみられたウスカワマイマイ(これも外来種)やイセノナマイマイなどの貝類が、今回はほとんど見かけませんでした。また、他の離島では鳥類への食害事例も報告されていますので、ウチヤマセンニュウの減少もドブネズミの影響が示唆されます。

早急に駆除対策を行うべきですが、実施にあたっては、ドブネズミの生息・繁殖状況や在来動植物への加害状況等の基礎調査を実施して、効果的な作業時期を選ぶ必要があります。また、根絶を目的とした駆除には殺鼠剤を用いるのが一般的ですので、漁協や地域住民の理解を得る作業もあわせて行わなければなりません。幸い、といっっては不謹慎ですが、和具大島は平坦な地形で面積も広くありま



写真1 和具大島(北側から)



写真2 海浜植物群落(2004年6月8日撮影)。円内がアツバキミガヨラン



写真3 写真2とほぼ同じ地点(2009年5月24日撮影)



写真4 ウチャマセンニュウの雄



写真5 ドブネズミの糞(中央黒い部分)

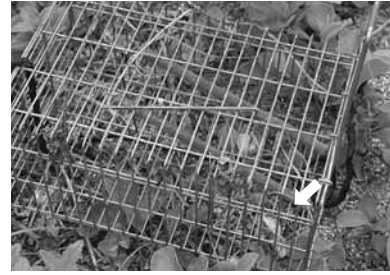


写真6 ネズミ罠内のドブネズミの頭骨
(矢印)

せんので、ドブネズミの駆除作業は比較的容易です。

和具大島は、最初へのべたように県指定の天然記念物であり、また、伊勢志摩国立公園の第1種特別地域に編入されています。本島の生物多様性を守るために、志摩市・三重県・国各関係機関の連携した取り組みを期待しています。

文 献

- 中村みつ子・若林郁夫. 2005. 志摩市和具大島のウチャマセンニュウについて. 三重の生きものだより, (26):2-6.
 市川雄二・中村みつ子. 2004. 和具大島の鳥類, 特にウチャマセンニュウについて. 自然誌だより, (61):2-3.
 半田俊彦. 志摩市和具大島におけるアツバキミガヨランの駆除. 自然誌だより, (70):7-8.

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

求む！ スクミリングガイの生息情報

中 優

近年、日本各地で外来種定着の報告が多くなっています。これら外来種は本来の生態系に影響をあたえ、また種類によっては人に危害を加えたり農林水産業に被害を及ぼしたりすることから、国は2004年に外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）を制定しました。スクミリングガイは植物防疫法により輸入が規制されていることから、外来生物法において規制を受ける特定外来生物には指定されていませんが、要注意外来生物リストの「選定の対象とならないが、注意喚起が必要な外来生物」とされており、未定着域への分布の拡大を防ぐ必要があるとされています。

スクミリングガイは南米原産の淡水産の貝類（写1）で、「ジャンボタニシ」として知られており、生貝での確認より、常に水面上にある赤い卵塊（写2）での確認が容易です。卵塊は、植物の茎、杭、コンクリートの壁面などで見られます。

同種については三重県での定着が確認されていますが、その定着状況について全県的に把握されていないように思われるので、その整理に取り組むことにしました。

つきましては、同種に関する情報を求めます。提供方法はFAX（0596-24-7394）を望みますが、この番号に直接電話いただいてもかまいません。提供していただきたい情報は、スクミリングガイを確認した場所（可能な限り具体的な地名、例えば池名など）と簡単な地図（FAXの場合）、提供者のお名前と連絡先です。提供いただいた情報については、現地踏査により再確認させていただく予定です。よろしくお願いたします。

参考文献

- 環境所HP (<http://www.env.go.jp/nature/intro/outline/caution/index.html>)

〈なか まさる：伊勢市小俣町本町 1284〉



写真1 スクミリングガイ



写真2 卵塊

鈴鹿市内へ渡来したカリガネの記録

市川 雄二

1 はじめに

カリガネ *Annser erythropus* (カモ目カモ科) は、マガンによく似ているが体長は58.5cmと少し小さい(写真1, 2)。嘴は短小で淡紅色, 先端は白く, 嘴の付け根の白色の部分は広く, 頭部にまで達する。幼鳥には嘴の付け根の白色も腹の黒帯もない。目の外縁はリング状に黄色い。

北極圏一帯の局所で繁殖し, 南下して越冬する。越冬地は主に中国南部などであるが, 日本でも東北部や日本海側の湖へ, マガンの群れに混じって少数が渡来する。環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧とされている。

今回, 鈴鹿市内でマガン2羽とともにカリガネ7羽の越冬を観察したので, 簡単ではあるが報告する。なお, カリガネについては, 1979年の三重県立博物館研究報告自然科学第1号「三重県の鳥類相」には記載されておらず, 県内からの報告は初記録ではないかと思われる。

2 観察期間

2008年1月13日から3月23日の71日間。

3 観察地

観察した場所は, 三重県鈴鹿市寺家町地内「御座ケ池」一帯である。御座ケ池は, 伊勢湾沿岸から約2km内陸にはいった約3haの溜池である。国道23号線から鈴鹿サーキットへ向かう通称サーキット道路の1km南西方向の位置にあり, 周りは水田が広がっている。この周辺地域は稲生町であり, その名の示す如く昔から稲作が盛んに行われていたところであるが, 現在は道路の両側には住宅地や店舗, 工場などが多く存在する。当池のすぐ南には御座池公園があり, 近接して市水道局がある。池の周囲は, 東から南にかけては公園や水道局へ繋がる道路があり, 南東から西にかけては小径が, 北側には建物がある。また, 池の周囲の所々にまばらに灌木(ケヤキ・アカメガシワなど)が成育し, また, 2m前後のヨシが約10mにわたって群生する場所が数カ所みられる。

4 確認の経緯

2008年1月13日に実施したガンカモ調査で, 当初は9羽のマガンとして記録した。鈴鹿市内ではマガンの記録も初めてのことであったので, 幸い写真に収めていた。しかし, 2月上旬, この地でカリガネがいるという情報があり, 写真および現地での確認をしたところ, マガンが2羽とカリガネが7羽であることがわかった(写真3)。

インターネットなどの情報によって, 他府県からも連日(平日は数名, 土・日祭日は数十名)バードウォッチャーや写真家などが訪れた。その後, NHKが夕方のニュースで放映した。その際, 池の名前がテロップで紹介されたが, 詳細な地名は放送されなかった。

5 人為等が本種に与えた影響

付近の住民の散歩, 魚釣り, 池の周辺の草刈りなどの外圧にたいして, 本種の群れは, 池では80m～



写真1 カリガネ



写真2 カリガネ(左)とマガン



写真3 カリガネとマガンの群

100m以上の距離をおいており、飛び去るようすはなかった。しかし、たまたま消防用ホースの試運転によって池に放水したため、一時は池から飛び去ったが、2日後には戻った。3月5日頃から、池から東方向300m付近の水田を朝夕の2回えさ場として利用しているのを確認した。その後は常にこの場所で採餌していた。人を余り恐れず、数m近くまで接近してきた。時折、ハシボソガラスの鳴き声で、一斉に首を伸ばして警戒のしぐさをするが、安全だとわかると採餌を続けていた。

6 越冬中の行動

御座ケ池には、冬鳥であるホシハジロ約1500羽、マガモ10羽、カルガモ25羽、カイツブリ3羽などの野鳥も見られた。

初見時は、池の南西部分の草原付近で休息や採餌をしていた。その後、水面をホシハジロの群れとともに泳いでいたり、北東の岸辺で休んだりしていた。時折、岸辺から池の中央へ一列、あるいは集まって泳いで戻ったり、数回上空を旋回したりしては戻っていた。昼間のほとんどをこの池で過ごしていた。行動に際しては、マガンを先頭にしてその後ろに行くことが多かった。



写真4 餌場へ向かうカリガネ

夕方になると、餌場へ向かった(写真4)。数回池の上空を旋回して南東へ向かう場合が多かった。飛び去る時間は厳密には決まっていないが、夕刻17時前後が多かった(16時40分や18時の場合もあった)。すぐ南側の水田で餌を採っていたとの情報もあったが、すぐには場所を特定できなかった。餌場の確認をするため飛んでいく方向を確認し、探すこと2日間、当池から南へ1.2km離れた水田で採餌しているのを確認した。餌場の水田は、稲刈りをした後に耕されて畝がつくられた状態であった。その後、3月10日には当池のすぐ(約200m)東側の水田に餌場を移した。この時には、朝方の8時30分頃から採餌をはじめた。餌場へ降りるときは、安全を確かめるため上空で数回の旋回をした。いずれも稲の穂を食べていた。

餌場所については、採餌を終えた個体は、旋回もせず、一直線に御座ケ池に着水したことから、本池が唯一の餌場と思われる。なお、雨天時については、終日、本池では見られなかったため、日中も採餌を行っているかと推察される。

3月21日、快晴で北北西の風が吹く日の6時30分、池を飛び立ち水田へ採餌に向かい、約3時間を費やした。9時42分に再び飛び立ち、御座ケ池上空を3回旋回後北北西方面へ飛び去った。観察時にはもう北国へ帰ったのではないかと思われたが、次の日も確認できた。

終認は3月23日であった。当日は6時30分に餌場の水田に飛来して採餌を行い、18時30分頃に水田を飛び去った。再度確認するため翌日も探したが、3月24日8時の時点で姿は見えなかった。従って23日18時30分から24日8時の間にこの地を離れたと思われる。旅立つ前の21日頃からは採餌の時間が増え、1～3時間になった。また、最後の日は12時間も水田で休憩や採餌をしていた。同時に、数人のカメラマンに対してもほとんど警戒しなくなり、最短5mにまで近づいてきた。

マガンも含めた9羽の群れは当地で無事越冬したことになる。

7 おわりに

今回、鈴鹿市に渡来したカリガネは、何かの影響で進路をはずれた迷鳥であると思われる。一つ考えられることは、日本近辺の越冬地である中国の南部が2008年1月10日、大雪に見舞われたという情報がある。(インターネットの情報による)。当市では1月13日が初認であるので、その影響があることも考えられる。もう一つ考えられることは、日本列島を南下する飛来コースで、少数の群れが、気象条件などの影響でコースを外れ、当地へ向かった可能性もある。いずれも当時の気圧配置など気象状況の影響かもしれないがあくまでも推測である。

本報告にあたっては、小林秀樹氏(鈴鹿市)の熱心な観察により得られた貴重な資料を提供してい

ただいたことに深く感謝を申し上げる。また、地元の方々の野鳥に対する熱心な観察と野鳥を大切に
する気持ちに感銘を受けた。ほとんど見る機会のない地味ではあるが、美しくて愛らしい7羽のカリ
ガネと2羽のマガンである。彼らの出会いから約71日間の観察であったが、いつ北国へ帰るかをぜひ
見届けたいと思う気持ちは、早朝から夕方遅くまで、都合の悪いときは交代で、連携しながら観察に
関わった人にしか分からない。人を余りおそれず、自ら人に5mにも近づき採餌しているのを目の当
たりにして、来年もこの地で再会できることを期待している。

〈いちかわ ゆうじ：四日市市城東町14-14〉

事務局から

○会報・会誌にご投稿ください

たよりの原稿が不足しがちで、季刊発行に苦慮しております。本誌も今号で83号を数え20年以上続
いていることに驚きますが、100号までは何とか続けたいと思っております。三重県の自然全般を記録
する媒体が見あたらない中で、それなりの役割を果たしているともいえますので、会員の皆さんも、
身近な自然観察の記録をドシドシご投稿ください。なお、会誌につきましても、今年度内に刊行予定
ですので、あわせてご投稿ください。記録のまとめ方等がわからない場合は、事務局にご連絡いた
ければ相談にのらせていただきます。

○三重自然誌の会ホームページ『会員専用掲示板』設置のご案内

三重自然誌の会ホームページに会員専用の掲示板を設置しました。投稿は至って簡単ですので、会
員相互の情報共有や意見交換、皆さんのフィールドデータの提供などに幅広くご利用をお願いします。
ぜひお試しください！！なお、会員専用としていきますのでパスワードが必要となっています。パス
ワードについては、お手数ですが自然誌の会までメールでお問合わせください。

ホームページ URL : <http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi/>

自然誌の会メール : mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp

○『しぜん文化祭 in みえ』が開催されました

今年も3月20、21日(土日)に、菰野町コミュニティセンターにおいてしぜん文化祭 in みえが開催
されました。三重県の新県立博物館計画や生物多様性に関するシンポジウム、県内で活動する自然関
係の団体や水族館、博物館の活動展示が行われ、2日間で900人近い来場者がありました。来場された
皆さんへの活動内容の紹介や様々な情報交換がおこなわれ、参加者の皆さんも楽しく有意義なひと
ときを過ごされたようです。このようなイベントのよさを新博物館にもとりいれて頂ければと思います。
北勢地区では初めてでしたが、関係者方々の気持ちも熱い気がしました。ただ、展示ブースは年々淡
泊になっているような気がして、少し寂しかったです。

編 集 後 記

冬号でありながら春の発行になってしまいました。いくつかの原稿は早くにいただいていたの
ですが、人並みに年度末の忙しさというやつでのびのびになってしまいました。申し訳ありません。
依頼された自然調査モノの報告書作成と、学校に勤めていますので一応年相応の働きはせねばな
らず、ブルーな3月でした。そろそろ、履くわらじを一足にする時期かなと感じています(善)。

自然誌だより83号

発行日 2010年3月31日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp